発展し続ける上海と日本人学校

上海日本人学校
石田　順（H21年度派遣）

〔発展する上海の様子〕

７月１６日から３１日まで、上海では第１４回世界水泳が行われています。日本からは北島康介選手や入江陵介選手、さらには世界中から最強のアスリートたちが、ここ上海に集まり連日白熱した競技が行われています。そしてその熱戦を一目見ようと上海だけでなく世界中から多くの観光客が、この夏上海には訪れています。

思えばここ３年間の間に、上海では多くの世界大会や世界的なイベントが行われてきました。そしてそれらのイベントを吸収しながら、日々上海は加速度的に発展し続けています。その発展の速度は日本では考えられないほどです。例えば、交通では１９９５年に地下鉄１号線が完成されて以来、わずか１５年で１１の路線が全面開通し、今現在，上海地下鉄の総延長は 424.7km、世界最も発達している地下鉄ネットワークの一つまでに成長してきました。そして，2012 年，さらに 12 号線と 13 号線の開通予定です。2015 年には総延長約 530km に、2020 年頃には 21 路線・総延長約 980km に達する予定であるそうです。また上海浦東空港からはリニアモーターカーも運行しています。29.863km を 7 分 20 秒で結び、営業最高速度は 430km/h です。乗ってみなければその速度や流れる景色の様子は分からないかもしれません。しかしその発展の陰で物価の高騰が上海では問題となっています。相対的に日本に比べれば、圧倒的に中国の物価は安いのですが、その中でも上海はその経済的な発展のため物価が年々上昇しているようです。私たち多くの外国人の移動の手段となっているタクシーでは、３年前初乗りが１１元（約１５０円）であったのが、７月末現在で１４元（燃油サーチャージャー代を含む）となっています。

上海トランスラピッド（リニア）

昨年、上海では「上海国際博覧会（上海万博）」が開催されました。総事業費約３９００億円、来場者数７３０８万人というこれまでの万博を遙かにしのぐスケールで、半年間にわたって展開されました。その中でも一番のメインパビリオンである中国館は、その人気ぶりから、７月現在再々オープンしていますが、現在でも３時間以上の待ち時間だそうです。

中学生によるよさこいソーラン

その上海万博ですが、昨年の５月１４日に日本人学校の子どもたちが参加する機会をいただきました。浦東校からは小学部６年生（９９名）と中学部３年選抜メンバー（６０名）が上海万博日本館特設ステージにて発表を行いました。発表は１０時、１２時、１４時半の３回行われました。当日はＮＨＫや時事通信社などマスコミも駆けつけ、多くの観客の前で張り詰めた緊張感の中、その演技は大変すばらしいものでした。

小学生による集団演技

〔上海日本人学校について〕

上海日本人学校浦東校全景

さて、その上海日本人学校について紹介したいと思います。昨年、この日本人学校の話題がニュースになりました。世界初日本人学校高等部の設立です。現在、上海日本人学校は２つのキャンパスから成り立っています。上海の西側、古くから日本人も多く住む虹橋地区にある虹橋校。そして現在もっとも急速に発展を遂げている浦東地区にある浦東校です。虹橋校は小学部だけのキャンパス。そして浦東校には小学部と中学部が共存しているキャンパスです。虹橋・浦東総児童生徒数は４月１５日現在で２４６２名で世界一の日本人学校です。そして今年度だけという期間限定ですが、その浦東校内に高等部が設立されました。つまり、浦東校キャンパスには現在、小学１年生から高校生までがともに生活していることになります。

浦東校には、2万㎡の校地にある4階建の校舎、冷暖房完備、全天候型トラックと人工芝のグランド、体育館が２つ・屋内温水プール・武道場、そして２万冊余の蔵書を有し、パソコンによる情報検索コーナーを備えた広い図書室メディアセンター、学部別のパソコン室、ウッドデッキテラス、特別教室等々世界屈指の教育施設を誇る学校です。その恵まれた環境の中で、児童生徒の元気な姿が毎日見られます。

日常の生活の中で、英語や数学などを学習している中学生の教室から廊下を隔てた特別教室では、小学生が大きな声で歌を歌ったり、小学生が花壇の草花を観察しているグラウンドで、中学生がサッカーやソフトボールなど、大粒の汗をかきながら体育を頑張っていたりするような授業の様子がたくさん見られます。そういったなかで、中学生は「小学生の見本となるような行動」を自然と心がけるようになるでしょうし、小学生は中学生の真剣に学ぶ姿を見ながら数年後の自分の姿を思い描くのでしょう。浦東校では、特別な行事などを利用して、小中の交流を図ることはあえてしていません。日常の生活のなかで児童生徒が日々感じることを大切にしています。

全校児童生徒で行われる大玉送り

しかし、そんな児童・生徒が一致団結して取り組むのが運動会です。全ての児童・生徒を紅組白組に分け、それぞれの種目で得点を競い合います。小学部の演技に、中学部は一生懸命応援をし、中学部の種目ではそのたくましさに、小学部の児童があこがれの歓声を上げる。そんな姿がみられるのも、浦東校だからこそなのでしょう。そんな全校児童生徒が一斉に競技するのが「大玉送り」です。毎年の恒例種目となっています。大きな玉を最初は小学１年からどんどん高学年に渡され、最後は中学生がそのボールをゴールまで運びます。浦東校運動会のハイライトでもあります。

そのほかにも、昨年度大きな被害に見舞われた青海省の地震に対する募金活動や、今年３月に発生した東日本大震災の募金の呼びかけ、あるいは、登校下校に行われる挨拶運動など、児童会・委員会を中心に小学生と中学生が一緒になった取り組みを行っています。

特に東日本大震災では、子どもたちの呼びかけが実を結び、日本円で88,000円、中国元で5,876,000元もの募金が集まりました。地震発生当時、タクシーに乗っていても運転手さんから「あなたの住んでいる場所は大丈夫でしたか？」と言葉をかけていただいたり、気にかけていただくようなこともたくさ

んありました。あらためて中国人の心の優しさに触れることができました。

現地校からのたくさんのメッセージ

上海の多くの学校からも励ましのメッセージをたくさんいただきました。なぜそのようなメッセージをたくさんいただいたのかというと、これまでの上海日本人学校と上海の現地校との交流の歴史があるからです。小学１年生から中学３年生まで、全ての学年が、上海の学校と毎年１回交流会を開催しています。昨年度も多くの学校を訪問させていただいた学年もあれば、浦東校に招待して様々な交流を行った学年もありました。

昨年度、中学部２年は実験学校東校を訪問させていただきました。まず、実験学校東校のグラウンドを使って、浦東校の生徒と現地校の生徒が一緒になって大縄を使ったスポーツ交流を行いました。その後場所を体育館に移して、文化交流を行いました。文化交流では、アニメやスポーツ、音楽など生徒たちが夢中になっている話題ごとに小グループをつくって、いろいろな情報交換を行いました。その交流の仕方もグループそれぞれです。あらかじめ持ってきた雑誌や写真などを使って、日本語や中国語で交流しようとするグループもあれば、英語を使って交流を深めている生徒たちもいます。また身振り手振りを使って交流しようとする生徒もいました。それぞれの学校の先生方はただただ見ているだけ。その交流の様子を遠くから眺めているだけです。

実験学校東校とのスポーツ交流

生徒たちは笑顔で交流しています

両校の生徒たちは大人の手を借りず見事に交流を深めていました。私たち大人は、交流というと、事前にいろんな準備をしたり、ましてやそれが外国の人との交流となれば、言葉の問題や文化の違いなどで躊躇してしまいがちです。しかし生徒たちの様子を見ていると、交流に一番大切なのは、「相手を信じること」だと気づかされました。身振りでも言葉が通じなくても、伝えようとする気持ちがあれば、かならずそれは伝わるのだという自信を生徒たちから感じ取ることができました。その自信はどこから来るのでしょうか。おそらく外国で暮らすことそのものが、生徒たちの心を柔軟にし、言葉の違いや文化の違いに対する寛容性が身についているのだと思います。そしてその寛容的な心と様々な体験から「思いは必ず届く」という自信につながっているのだと思います。それは鳥取ではなかなか身につくことができないものかもしれません。

最後は歌で交流を深めました

交流会の最後に、お礼として浦東校の生徒から歌のプレゼントをしました。心を込めて歌う生徒たちの姿がとても感動的でした。しかし、私たちが学校を離れようとしたとき、実験学校東校の生徒からも歌のプレゼントがありました。その歌は森山直太朗さんの「さくら」。なんと日本語で歌ってくれました。以前、ある先生から「子どもたちは小さな外交官。私たちが考えつかないようなアイデアや純粋な心で懸命に日中の架け橋になろうとしている。」という言葉を聞いたことがあります。私は両校の歌を聴きながら、その姿に虹の架け橋を見たような気がしました。